

自らの心の中での不安からの勝手な想像。全てはそこから始まった。学期の始めに仲良くなり、そこから一年間その友達と過ごした。どんなときも互いが互いのことを気遣った。そして、時にはライバルにもなった。僕たちはテストの成績がほとんど同じで、席が近くなれば勉強方法を教え合ったり、問題を出し合ったりして、お互いを高め合ってきた。そんな一年を過ごし、心が大きく成長したことを実感し始めていた。

次の学年、その友達と同じクラスになった。しかし、友達も新しく出会った人と交流を深めていき、自分だけが取り残されているように感じ始めた。次第に、

「なんで自分と話してくれないの。」

という怒りが心の底から喉の先までふつふつと出そうになってきた。そんな中でも心の支えになったものがあつた。それは部活動だ。今までも何か心に残るものがあつたとしても、野球をやれば何もかも忘れて、一日を気持ちよく終わることができた。しかし、今日ばかりは違った。普段なら笑い話になることも真剣に心に受けてしまった。ついには、同じ仲間が言ってくれたアドバイスが自分の中で変換され、全て悪口になって心に突き刺さった。その日の部活終わりに

「部活やめようかな。」

と本気で思い、本気で心に刺さった。

その日の夜、母に連れられ、温泉に行った。平日の夜ということでは仕事終わりのサラリーマンが多かった。子供は誰一人としていなかった。なんだかそれが心の救いになった。そんな時間を過

ごすうちに、浴場で心の鎖が少しずつほどけていくようだった。ほどけていくうちに、一つの発見があつた。周りの大人は、今の自分の状態が毎日続いている人もいる中で必死に生きていると感じ、生きることでどれだけ簡単ではないかに気づかされ、心を空にして一日の終わりを迎えることができた。

次の日の朝、何よりも真つ先に昨日の自分の心に残っていた友達の笑顔が思い出された。全ての笑顔が自分の心を優しく包み込んだ。勉強を教えてくれたのも友達、苦しいときいつしよに遊んでくれたのも友達。「自分一人ではここまで生きてこられなかった」そう強く感じた。その朝、全ての友達に謝りに行き、より深い交流を手に入れることができた。スライムの上に乗っていた重い石が全て吹き飛んだようななんともいえない爽快感が体中を駆け巡った。

この日を境に、

「友達とは何なのか、本当に必要なのか。」

と考えることが増えた。しかし、自分の答えが増えることはなかった。自分が思うに、友達とは、

「対立し合える仲間で、社会に踏み出す一歩をとともに作り上げていく存在であり、それは友達の数だけ自分の自信になっていく。」ということを、あの日から今まで暗中模索してきた生き方がパツと視界が開け、自分は自分という生き方を考えられるようになった。

最初に書いた「自らの心の中での不安からの勝手な想像」が、この先今回の経験以上に心を苦しめることが起きる可能性は絶対ないとは言いい切れない。けれど、今回のように心が折れることはないと言いい切れる。あの日、あの時を境にして、心の中で漂っていた「勝手な想像」が少しずつ消えていった。

このことから、未来の自分は今の自分で決めることを心の中心として強く意識した。もし、明日何が起ころうとも心は絶対に折れない。自分の今回の経験が自分の心のサポーターだから。